

平成 23 年度徳島県立博物館・鳥居龍蔵記念博物館協議会

〔開催日時〕

平成 23 年（2011）9 月 2 日（金） 午後 1 時 30 分から 4 時 10 分まで

〔場所〕

徳島県立博物館 3 階 講座室

〔出席委員（順不同・敬称略）〕

下川 純代（徳島県小学校教育研究会理科部会理事 落合小学校長）

三木 宏亮（徳島県中学校社会科教育研究会会長 井川中学校長）

山下 知之（徳島県高等学校教育研究会地歴学会副会長 新野高等学校教

頭）

松下 師一（松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館館長補佐兼任学芸員）

嶋田 由紀子（徳島県立博物館イベントボランティア）

玉有 繁（徳島文理大学教授）

野水 祥子（（財）徳島県国際交流協会職員）

佐藤 陽香（徳島新聞社編集局文化部記者）

松島 真由美（八万中学校 PTA 本部役員）

1 開会（副館長）

2 館長あいさつ（館長）

昨年の博物館の状況について（文化の森総合公園開園 20 周年、鳥居龍蔵記念博物館の開館）。今後もより一層、地域に開かれた博物館を目指す。

3 委員紹介（副館長）

（1）各委員の紹介 当日出席は 10 名中 9 名

（2）事務局職員の紹介

4 会長、副会長の選出

（1）事務局一任の提案により、会長は玉有委員、副会長は町田委員を選出。

→承認

（2）会長あいさつ

昨年、文化の森総合公園は開園 20 周年を迎え、一つの大きな区切りを越えた。県立博物館と昨年新たに加わった鳥居龍蔵記念博物館は、今後も徳島県の文化の中心を担っていくことになる。県民のさらなる期待に応えられるよう、つとめていただきたい。委員のみなさんも博物館の発展に寄与するよう、ご協

力・ご支援をよろしくお願ひしたい。

5 議事

(1) 平成 22 年度事業実施状況について

(館からの説明)

① 展示 (『徳島県立博物館年報 (平成 22 年度)』 3-17 ページ)

常設展では、部門展示の展示替えや、予算措置を伴わない小規模な展示を行った。3回の企画展を行った。特別陳列は2回行った。とくに「海を渡った人形と戦争の時代」では、「青い目の人形」アリスや答礼人形「ミス徳島」が広い関心を集めた。

② 普及教育 (『年報』 18-27 ページ)

普及行事は、1年間に 93 件開催し、参加人数は 8,818 人で、前年より増加した。出前授業等の学校での博物館の利用は、徳島市の小学校を中心に、多数あった。

公募ボランティアの活動も、10 名の継続ボランティアを中心に、イベントの企画運営などを行った。

③ 情報の発信と公開 (『年報』 28-30 ページ)

博物館の広報活動は、ちらしやリーフレット等の印刷物での広報や、テレビ・ラジオ・新聞などのマスコミを通しての広報、インターネットによる広報などを行っている。特にホームページでは、データベースによる検索やサイトマップを設置して、多くの情報を分りやすく、博物館をより良く利用できるよう、常に心がけている。

④ シンクタンクとしての社会貢献 (『年報』 31-36 ページ)

主として博物館の知的資産の活用について、「シンクタンク」と位置づけている。主なものは、一般県民等の質問に対応するレファレンス業務。その他、講師派遣も多く、学会・研究会等の運営にも貢献している。他施設との連携にも力を入れている。

⑤ 調査研究 (『年報』 37-47 ページ)

平成 22 年度は「剣山系の昆虫相」、「徳島県の離島における図像民俗誌作成のための調査」、「星河内美田銅鐸の復元」の3つの課題調査を行った。

他機関との共同研究としては、タンポポの分布調査を行ったところ、たくさんの方の参加があり、その成果を展示や解説書にまとめた。

他の個別調査を含め、多くの成果があり、論文や学会等で発表された。

おおむね調査研究は活発に行われており、目標に達しているが、予算が削減される中、外部資金の獲得が課題となっている。

⑥ 資料の収集・保存と活用（『年報』48-53 ページ）

資料の収集は、近年、一般県民や行政機関が行う調査資料の寄贈の比重が増している。資料購入は平成 17 年度以来行われていない。平成 22 年度の新規資料増加点数は目標値を大きく下回り、ここ 12 年間でも最低だった。平成 22 年度が文化の森開園 20 周年にあたり余力がなかった。

資料の活用については、展示における利用促進の指標を盛り込んだ。

⑦ 管理運営・マネージメント（『年報』54-55 ページ）

組織・職員については、3 課 21 名体制で業務執行しており、平成 22 年度予算については、2 月補正後、44,124,000 円。

また、博物館協議会を平成 22 年 9 月 30 日に開催し、協議会委員を平成 23 年 8 月に改選した。

⑧ 鳥居龍蔵記念博物館について（『徳島県立鳥居龍蔵記念博物館年報（平成 22 年度）』3-18 ページ）

昨年 3 月末に鳴門市にあった旧館が閉館、4 月から最終的な資料搬出作業を行った。その資料の整理と開館準備のための展示作業を並行して行い、11 月 3 日に開館した。そして、11 月 7 日には開館記念講演会を、3 月 21 日にもミュージアムトークを開催し、普及事業にも取り組んだ。

（質疑応答）

委員：これまでの事務局の説明について、ご発言をお願いしたい。

委員：平成 22 年度の事業の成果はよく分ったが、今後の課題となることは何か？県財政が厳しい状況のなか、予算の削減や利用者（の減少）についてしばしば耳にするが、昨年度その点は、大きくクローズアップされていないように思われる。少し補足をお願いしたい。

委員：予算の問題は、博物館も含めた文化施設全般の問題だ。そのあたり率直にご発言いただきたい。

事務局：予算状況は厳しい。ただし、企画展「聖地★巡礼」は四国遍路の世界遺産化という政策的な課題にからんでプラスされた。また、特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」は外部資金を獲得した。このように、展示は外部資金

の獲得に力を注ぎ、事業を継続できている。

また、博物館の使命として、県民とともに成長する博物館を掲げている。利用者については、触れることができる展示を設けるなど、子どもを博物館に引きつける工夫をしている。さらに、ふだん博物館にあまり足を運ばない若年層を、いかにして博物館に関心を持ってもらうかが課題だ。

委員：PTA がどんなことを博物館に対して感じているか、30 人にアンケートしてみた。その結果、次のことがわかった。博物館では普及業務に力を入れていることは承知しているが、個人個人に尋ねてみると、必ずしも浸透しているとはいえない。

この夏休みに、久しぶりに子どもと一緒に博物館を訪れた。そのとき、子どもが小さいときに感じた「良い」という感覚が記憶されており、今回再び来館し、ほっとする感覚を得た。ホンモノ（実物資料）を見ることができた点も良かった。あらためて博物館の存在感を感じた。今後も長く愛される博物館を目指してほしい。

ところで、昨年刊行されたタンポポ調査の冊子は、どのようにしたら手に入るか？

事務局：『みんなで調べた徳島のタンポポ』の本は販売している。リーフレットは無料で差し上げている。

委員：博物館のリニューアルも必要だが、別の面では、変わりなく博物館がここにあることも大切だ。

委員：『年報』64 ページに記されている、展示のテーマの選定について、博物館ではどのようにテーマを選定しているか？またその方針は？

事務局：企画展は3年前にテーマを決め、調査等の準備に取り組んでいる。発案はまず各学芸員が行い、調査研究をもとに資料選定を行い、学芸会議での話し合いを経て、決定している。分野のバランスやタイミングなども十分考慮しながら検討している。過去に行ったことのある展示でも、ネーミングや切り口を変えると、来館者が増える場合がある。現在開催している特別陳列「博物館の宝もの」は収蔵品展だが、たくさんの方々にご覧いただいている。

委員：学校への学芸員の講師派遣（出前授業）について、博物館からは何か積極的なはたらきかけをしているか？

事務局：依頼を受けてはじめて学芸員を派遣している。なお、講師派遣は学校に限ったものではない。

委員：講師派遣の謝金は？

事務局：謝金や交通費は、いただいていない。

委員：博物館や学芸員は、世間一般では「距離がある」と思われているが、出前授業などを行うことで、より身近に感じるようになると思う。

委員：地域の住民にとって、より身近な博物館を目指してほしいと思う。

委員：市町村の博物館からみれば、県立博物館はより専門的な調査研究を行ってほしい。ただし、地域住民にとっては、市町村立であっても、県立であっても、住民に身近な施設であるべきだ。県立博物館に求められるものは幅広い。3つ質問・提案がある。

1つは、シンクタンクに関して、自然系学芸員は徳島においては（専門家が少なく）、貴重な人材だ。自然系学芸員の力をうまく活用できるよう、本人の努力はもちろん、周辺もはたらきかけていくことが重要だ。県のシンクタンクという観点に立つならば、県政の課題をもっと意識して、博物館運営や調査研究を行ってはどうか？『年報』においても、その点をより意識して、まとめてはどうか？まとめ方に工夫が必要だ。

2つ目は、博物館の「ブランドイメージ」をうまく作ることができるのではないか？（例えば、徳島市立徳島城博物館はイメージしやすい）。「ブランドイメージ」を県立博物館でつくるか、文化の森という単位でつくるかは検討を要する。

3つ目は、鳥居龍蔵記念博物館に関して、鳥居龍蔵を軸にしながらも、他のふるさとの先人も絡めながら、調査研究に取り組んでほしい。

委員：博物館の「ブランドイメージ」に関して、県立博物館は総合博物館としてスタートしているから、一つの方向に主張していくことは難しい。しかし、「ブランド戦略」の観点から一考してみることも重要だと思う。

事務局：シンクタンクについては、自然系学芸員は県内外の多くの委員をつとめているところである。県政の課題について、当然、博物館としてやらなければならないことはある。昨年度の企画展「聖地★巡礼」のように、県からの政策に沿った形で展示を行うこともある。

「ブランドイメージ」については、会長の発言どおり特定の方向に傾斜するのは難しいが、当館はただ何でもあるというのではなく、「様々な分野が連携する」というのがセールスポイントであると認識している。

鳥居龍蔵記念博物館については、現在は資料整理が急務であり、なかなか他の事業まで手が回らない状況だが、いずれ他の先人も取り上げたいと考えている。

委員：博物館は、その時代の課題を敏感に感知し、現代の課題・地域の課題に取り組んでほしいと思う。例えば、県内にも過疎地域の集落があり、将来は消滅してしまう危機にある。離島の民俗や伝承文化も同様であり、それらを調査・記録していくことも、博物館のシンクタンク機能として大いに意味があると思う。

(2) 平成 23 年度事業概要及び予算について
副館長が説明。

委員：県立博物館は 20 % の予算減だが、鳥居龍蔵記念博物館は 3 倍増の予算で、ある意味「メリハリのある予算」といえる。
では、ご意見・ご発言をお願いしたい。

委員：県西部から博物館まで出向くのは難しい。さらに、最近バス遠足もなくなってきた。実際は自分の目で見るのが大切だが、県西部からは県立博物館に来られないのが実情だ。それを補う意味でも、出前授業に力を入れてほしい。出前授業は小学校では多く利用されているが、中学校では少ない。博物館でも宣伝を行ってもらい、さらに自分としても中学校教員にもっとはたらきかけをし、取り入れていきたいと感じた。

委員：実際は子どもたちが博物館に来て、展示を見ることが望ましいが、それが難しい場合は、館から出向くことが大切だ。博物館の出前、つまりアウトリーチに期待が高まっているが、その点についてはどうか？

事務局：できるだけ声をかけてもらえるよう、4月に行われる校長会などを通じて、出前授業の紹介を行ったりしている。

委員：淡路島では歴史研究会の団体が研修を開催し、バス代の補助をしていると聞いた。移動手段については、制度として助成があるべきだと思うが、博物館単独ではなくても、徳島県において何か検討すべきではないか。

委員：その点は、博物館単独での取り組みを越えることだが、徳島県全体の生涯学習を盛んにするための仕掛け・基盤についても、検討しなければならない。

委員：県の西部や南部の方は、博物館に一度も足を踏み入れたことがない人もいるだろう。博物館を利用することは、誰にでも与えられた権利であり、たとえ遠隔地であっても、徳島市内と同じような機会があれば良いと思う。県の西部・南部にも、もっとアピールして行ってほしい。

委員：子どものときの文化施設の利用体験はとても重要だ。地域間格差を解消するためには、県全体で考えていく必要がある。そのとき、博物館と地域住民とを結ぶのがメディアであり、その役割が重要だ。その点について、ご発言をお願いしたい。

委員：博物館と徳島新聞との関わりでいうと、各週夕刊の「子ども新聞」がある。

博物館は『研究報告』を出しているが、学芸員がどのような研究をしているのか、即座にはわかりにくい。新発見などがあった場合、マスコミを活用すれば、県民により広く活動を知ってもらえる機会が増えるはずだ。学芸員が取り組んでいる調査研究を、事前に記者に知らせるなどして、もう少し博物館とメディアとのやりとりを密にしてはどうか。

委員：予算が大きく削られているなかで、無料で博物館の宣伝ができるマスコミをうまく利用しない手はない。メディアに対しても、関心を持ってもらえるような切り口を出すことが重要だ。

委員：徳島県の観光なども視野に入れ、戦略的に博物館運営を行ってはどうか。例えば、常設展には四国遍路の展示はあるが意外と少ない。県の観光などの部署と連携をはかってはどうか。

展示テーマについては、アンケートに要望を記入する欄はあるか。ホームページについては、魅力的な情報発信をすればアクセスも増えると思う。

委員：企画展アンケートに、催しものについての希望を書く欄はあるか？また、ホームページのメンテナンスやデザインは誰が行っているか？

事務局：アンケートには感想を書く欄があり、そこに希望するテーマを書いてもらっている。テーマの希望だけを書く欄はない。

ホームページについては、外注ではなく、職員が対応している。博物館のホームページのアクセス数は、文化の森ではとくに多い。展示の情報や学芸員の研究なども掲載している。

四国遍路の展示については、常設展では少ないが、企画展などでしばしば取り上げている。常設展でできないことは企画展で補っている。

政策との連携は必要に応じて行っているし、博物館の独自のスタンスも大切にしている。

委員：様々な県の動きも博物館の活動に取り込んでいくことが大切だ。たとえば県立近代美術館の手塚治虫展にあわせて、博物館において関連行事を行うなど、もっと（集客に）どん欲になってもよいのではないか。

たくさんの方の考えやアイデアを活かしていく必要があるが、博物館のイベントボランティアでは、どのような活動をしているか？

委員：自分たちが企画してイベントをしている。

委員：ボランティアならではの発想はあったか？

事務局：たとえば影絵など、学芸員が思いもよらなかったアイデアがあった。それによって、学芸員が考える以上の企画を行うことができた。

委員：専門家とそうでない人が協働し、コラボレーションを図ることで、学芸員の目からうろこが落ちるようなことがあると思う。新しい視点・新しい方向が見える場合もあり、今後も協働・コラボレーションを広げて行っていただきたいと思う。

そういった点では、県立博物館も地域社会のなかにあるといえるが、地元からみた博物館はどうか？要望などは？

委員：子どもが小学生のときは、まだゆとりもあってよく来たが、中学生・高校生になると親もゆとりがなくなっている。しかし、子どもが成長し、親になったときのことを考えると、小さいときの博物館体験は重要だ。親子で来てほしいと思う。

委員：博物館は県民や地域住民によって支えられている。その点に関連して、金沢 21 世紀美術館では、市内の小学 5 年生に無料券を渡し、次は大人と一緒に来館するしくみを作っていると聞いた。博物館においても地域を巻き込んで様々な工夫をしてほしい。

他にご意見などは？

委員：鳥居龍蔵には個人的にも興味を抱いているので、今後の企画展などが楽しみだ。鳥居龍蔵記念博物館への要望として、顕彰も大事だが、鳥居が残した現代的な意義を問うような展示も行ってほしい。現代的な視点から見つめ直してほしいと思う。

事務局：そのとおりだと考えている。資料整理が進めば、展示できる資料も増え、鳥居の業績はより一層明らかになる。鳥居龍蔵の足跡を辿るだけでなく、現代における意義も含めて、調査研究を行い、成果を発信していきたい。

委員：鳥居龍蔵記念博物館の展示解説書はあるか？

事務局：現在作成中である。

委員：現在、徳島県も国際交流の時代を迎え、多文化共生への取り組みや地域づくりを行っている。鳥居龍蔵記念博物館は、国際交流という点においても関連が深い。県政の課題に、どん欲に取り組んでほしいと思う。

委員：学校教育の立場からすると、鳥居龍蔵についての DVD があると学校現場で活用できると思う。DVD を作成し、各学校に配布してもらいたい。

事務局：検討したいと思う。

(3) その他

委員：近い将来起こるといわれている南海地震に対して、博物館ではどのような対策をしているか？

事務局：避難訓練は毎年行っている。来館者の生命、職員の生命を第一に考えている。資料の保全には留意しているが、非常時に資料のことを最優先に考えるのは、現実的には難しいのかも知れない。県立博物館は避難所に指定されており、今後、そうした面も含めて対策を検討しなければならない。

事務局：少し補足したい。人命が第一であり、文化の森は避難所になっている。十分な水や食糧の確保についても検討している。また、美術館では資料の転倒防止などにも取り組んでいる。

委員：県立博物館は県内のミュージアムネットワークの中心・拠点であり、災害時の資料の救援の拠点にもなるだろう。博物館の果たすべき役割を協議してまとめていただきたい。

委員：博物館のリスクマネジメントについても検討してほしい。県立博物館は県民の、いわば「宝箱」であり、貴重な資料を守る役割がある。

委員のみなさま、様々なご意見・ご提言を出していただき、感謝を申し上げます。博物館においては、本日出された意見・提言を活かしていただきたいと思います。

事務局：貴重なご意見・ご提言に、お礼を申し上げます。今後の博物館運営に活かしていきたい。

6 閉会（副館長）

（以上）